

# 国際異文化学会 第2回 春季研究発表会 レジюме

## 1. *Ulysses* の序章としての *Dubliners*

劉 暁

レオポルド・ブルームを主人公としたジェイムズ・ジョイスの小説 *Ulysses* は、当初彼がその前に執筆した短編集 *Dubliners* に収められる一編となる予定であった。そのためか、結局 *Ulysses* は一つの作品として独立したものの、その中に *Dubliners* から受け継ぐ要素は多い。

例えば *Ulysses* では、やはりダブリンという都市を舞台に、*Dubliners* に登場した多くの人物たちが引き続き登場したり言及されていたりする。しかしジョイスはこの2作を書く間に文学的変遷を経ており、*Dubliners* を執筆する上で主軸とした「Paralysis」(麻痺)は、*Ulysses* においては時々その片鱗をみせながらも、「日常性」や「愛」といったものに昇華され、*Ulysses* は反暴力・反民族主義などの時代への反論を持ち合わせる結果となった。そうしてみたとき、「序章」としての *Dubliners* から「完成形」である *Ulysses* への変遷という道筋が見えてくる。

発表では *Dubliners* 中の"The Dead"、"Sisters"、"Clay"などを中心に、ジョイス文学の変化の過程及び「*Ulysses* の序章」としての *Dubliners* について考察し、最終的には *Dubliners* の文学的価値を再検証したい。

## 2. CALL 教室の導入とその問題点

東京都立産業技術高等専門学校 助教 大古田隆

CALL システムは多くの大学を始め、高等専門学校、高等学校にも導入されるようになった。本校も例外ではなく、既に CALL システムが導入されている。平成 23 年度 3 月に本校 CALL システムの使用期限が満了を迎えるに当たり、新たな機器へ更新することになった。その 1 年前に、CALL システムの入れ替えの責任者としての役割を任せられた。当初、文科系の私には大きな負担になると予想された。実際に CALL 教室を使用する多くの教員に共通しているのは、詳しいコンピュータの知識を持ち合わせていないということである。そこでシステム構築は業者にすべて任せてしまうことになる。その結果、こんなはずではなかったということになる。このような事態をできるだけ回避するには、教員がどのような授業を展開したいのかというイメージを持ち、それに必要なシステムが構築できるかを模索することである。さらに、学習者が CALL システムを使うのに適切な環境を整えることも必要である。これらの観点から、CALL システムの導入に注意すべき点、そして導入後の展開と問題点について検証していきたい。

### 3. ワシントン・アーヴィングとネイティブ・アメリカン

瀧口 美佳

18世紀初頭の建国間もないアメリカにて活躍した作家ワシントン・アーヴィングは、アメリカ最初の職業作家のひとりであると目されている。当時のアメリカ文壇は形成期にあったと考えられており、ヨーロッパ文学の模倣に近いものが多かった。アーヴィング自身も、文化的な伝統の豊かなヨーロッパ大陸に魅力を感じており、ヨーロッパでの見聞や経験を代表作である初期の短編集 *The Sketch Book* (1819-20) で読者に向けて紹介したのであった。そのため、ヨーロッパに偏った作家であるという印象をぬぐえずに、20世紀の文学批評家たちからは、否定的な評価を受けることが多かった。

しかし、アーヴィングはただ単にヨーロッパの文化伝統に憧れただけの作家ではなく、当時のアメリカの一般社会にも目を向けていた。*The Sketch Book* に収められている“Rip Van Winkle”や“The Legend of Sleepy Hollow”は、ドイツの民話を基に舞台をアメリカに変えている。また、ネイティブ・アメリカンを題材にした“Philip of Pokanoket”と“Traits of Indian Character”も収められている。その他には、1815年から17年間にわたるヨーロッパ滞在を終えた後、記念すべき帰国後第一作目として出版された *A Tour on the Prairies* (1835)、ビーバー取引で巨大な富を築いたジョン・ジェイコブ・アスターについて書かれた *Astoria* (1836)、そして1832年から35年における西部ネイティブ・アメリカンの明確な記録として、その価値が認められた *The Adventures of Captain Bonneville* (1837) などがあげられる。

本発表では、アーヴィングの数あるアメリカを題材にした作品の中から、上記“Philip of Pokanoket”と“Traits of Indian Character”に着目し、アーヴィング文学の前半期におけるネイティブ・アメリカンの描き方などについて論じたいと考えている。また、「レザー・ストックキングテイルズ」五部作を著した、同時代の文豪ジェイムズ・フェニモア・クーパーが、描いたネイティブ・アメリカン像との比較についても検証したい。